
掌編集

百花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掌編集

【Zコード】

Z2667Z

【作者名】

百花

【あらすじ】

二次創作あり、オリジナルありの掌編集です。
更新は超不定期。

A f t e r i t i s k i l l e d c r u e l l y (前書き)

ハコチラムークスプレンヒトマの物語。

After it is killed cruelly

「今日は何人殺したんだ?」

「さあな」

「さあなでは無いだろ?」

堅苦しい口調のスプレンデイドは頭を搔いた。

「俺は周りにいた奴を殺つただけだ。べつにてめえにどういう言わ
れる筋合いはねえ」

覚醒したままのフリッピーは赤く染まつた迷彩服のポケットに腕を
突つ込む。

「軍人君」

英雄は悲しげな顔をした。

「フリッピーが悲しむぞ?」

「死ぬよりはマシだろ」

繰り出されたナイフは首筋に辿り着く事無く取り落とされる。

「戻りたまえ。でないと君を殺さなければならぬ」

「クソ」

軍人は小さく毒づいた。

押さえつけられた右手がじりじりと痛む。

「次会つたときはぜつて一殺す」

物騒な言葉。

直後に軍人の瞳が漆黒で塗り込められた。

英雄は手の力を緩めた。

「あれ?」

軍人の声が急に緩む。

「スプレンデイドさん?」

「フリッピー」

英雄は柔らかく笑つた。

「これ僕がやつたんですか?」

周りの惨劇を見回し、フリッピーは悲しげな顔をした。

「君じゃない。やつたのは軍人君だ」

「分かりました」

フリッピーは懺悔するような表情で目を閉じた。

「アイツは僕ですから……やつたのは僕です」

フリッピーは振り向いた。

「家に帰りますね。なんだか疲れちゃいました」

苦笑いに似た笑顔でフリッピーは会釈をした。

「さよなら、スプレンディードさん」

びちやびちやと血の海を歩くフリッピーにスプレンディードはため息をこぼした。

「君は君、軍人君は軍人君だよ。フリッピー」

冬の夜話（前書き）

オリジナルの掌編です。
登場キャラはcross

worldより、弥々華とリップ。

冬の夜話

寒さに体は縮こまる。弥々華は何度目か分からぬ寝返りをうつた。

「ダメだ。寝れない」

退屈に任せて寝溜めと洒落込んだのが悪かつたのだろう。深夜の2時を過ぎてなお、眠れない。

弥々華はぼうつと暗い部屋を見つめていた。少し埃っぽい、飾り気の無い部屋だ。

不意に弥々華は低く呻いた。

「喉、乾いた」

弥々華はゆっくりと体を起こした。軽く目眩がした。

「寒……」

パジャマの上から、コートを羽織る。ガサガサして不快だが、生憎ガウンなんて洒落た物は持つていなかつた。

財布をひつつかみドアを開けて鍵を掛ける。

気分転換に、階下したの自動販売機に行こうといつのが、弥々華の考えだ。

App Storeの寮とも言える居住棟の廊下は、不気味に薄暗い。暖房も入っていないのか、背筋がざわざわと粟立つた。

「はあ」

何気なくため息を漏らす。

たどり着いたエレベーターホールは、それなりに明るい。

弥々華はエレベーターのボタンを押した。氷のような冷たさに、弥々華は体を強ばらせた。

1階からエレベーターがぐんぐん上がつてくる。

チーン。

間の抜けた音を立ててエレベーターのドアが開いた。中は目が痛く

なる程、明るい。

1階のボタンを押すと、ドアが閉まった。

内臓がひゅーっとなる感覚と共に下降する。

ドアが開いた。

体を滑らせるように外に出る。自動販売機は煌々と光を放ち突っ立つていた。

「何にしよう……」

飲み物をひとつと眺めると、見つけたのは温かいコーンスープ。

「これにしよう

指先で硬貨を入れ、ボタンを押し込む。

ガダンダン！

そんな音を立てて落ちてきた缶を取り出す。

「あつたかーい」

指先が熱い。でも気持ちいい。

弥々華の顔が僅かに緩んだ。

缶はポケットに入れた。足の付け根が温かい。右手もポケットに入れた。手が柔らかくなるのを感じた。

「あれ？ 弥々華？」

弥々華は不意に名前を呼ばれ、飛び上がった。

「あ、リップ。お帰り」

弥々華は目玉を見開いたまま、それでも柔らかく言った。

「任務明け？」

「うん。そう」

リップは首を縦に振る。

「本当に」

そう言つてリップは欠伸をした。艶が減つた髪をかきあげる。

「護衛なんて、口クな仕事じゃなかつたわよ」

柔らかく言つたリップに、弥々華は苦笑した。

「寒かつたし？」

「そうそつ」

リップはそう言つて笑う。

「飲み物でも奢る？」

「いいの？」

リップは珍しいと、呟いた。

「いいよ。お疲れさんって事でさ」

弥々華は事も無げに言つと小銭を手渡した。

「ありがとう」

「気にしなさんな」

リップは自動販売機に小銭を入れる。選んだのはココアだ。

2人は並んでエレベーターに乗る。

「で、護衛つてどんな事したの？」

「小さな男の子の護衛。つていうか子守かな？」

「子守？」

「そう。なんか、政治家の息子だったの。あの能力者否定派の」「ああ、あの」

弥々華の脳裏に浮かぶのは、連日ニュースで見かけるあの顔だった。いつも能力者を差別した発言を繰り返しては、他の政治家に非難されていた男だ。

「だからさ、大変だったのよ。能力者差別するような事言つし。カエルの子はカエルつて奴かな」

その言葉に弥々華が吹き出した。

「あ、カエルつてそう言つ意味じやないよ？」「知つてる……けど」

弥々華はまたゲラゲラと笑い出す。

「やつぱり出るじゃん！！ 頬」

ひたすら笑う弥々華に、リップは苦笑した。

「あ、着いたよ？ 弥々華」

「本當だ」

呼吸を整えるとエレベーターから降りる。

弥々華は頬が引きつるのを感じた。

「じゃ、弥々華。お休み

「お休み、リップ」

部屋の前で、弥々華は手を降つた。

解錠し、ドアを開ける。

弥々華はコーンスープの缶を取り出すとコートを脱ぎ散らかした。
ベッドに腰を投げ出すとスプリングがギシリとなつた。

プルタブを開け、喉にスープを流し込む。

「……ぬるい」

弥々華はムツとした顔で、缶眺めた。

ぬるいコーンスープは価値が無い、少なくとも半減すると思いながら。

end

弥々華 よつじそ、ケロン人ライフ あります（前書き）

ケロロ小隊 + 弥々華^{オリキキャラ}・小ネタです。

弥々華 ようこそ、ケロン人ライフ あります

その爆発は不意打ち過ぎて、弥々華は何の対応も出来なかつた。

何がどうなつた？

意識が無くなる直前、弥々華が考えた事である。

弥々華 ようこそ、ケロン人ライフ あります

「う……あいつたあ～」

弥々華は軽い目眩と共に体を起こした。ペチャリという感覚と共に、額に僅かな痛みが走る。

「あたた……頭切ったかなあ……」

クラクラとする感覚を抑えつつ弥々華は地面に腰を下ろし、固まつた。

「あれ？」

視線がいつもよりも低い氣がする。うつぶせになつた時とさほど変わらない場所に、視線があつた。

ぐちゃつき始めた頭で、弥々華は何気なく下を見て、今度は愕然とした。

「…………え？」

穿いていた筈のジーンズはどこかに消え去り、代わりになめらかで艶のある、黒く短い足が生えていた。

「あ…………え？」

さらに目に入った指はかなり短く、こぢらも黒い。

「ちよつと…………なんで？」

顔に触るとペチャリという感覚が走り、何時もの数倍は大きくなっていた。髪の毛に触れれば、それは無く布の感触。顔の横に降りていた。

「……もしかして……あたし」

弥々華は布を握り締める。体の震えが止まらない。

「……ケロン人に……ケロン人になってるーーー！」

「弥々華ーーー。あいつどこ行つたんだ？」

クルルはラボをぶらつきながら、先ほど物置に駆け込んだ弥々華を探していた。

隊長に頼まれたー、と言つて駆け込んでから早数時間。流石に心配になつたケロロから搜索命令が出たのだ。

「階級章もつけてねえしよ……一体どこに」

その時だつた。

「……ケロン人に……ケロン人になつてるーーー！」

馬鹿みたいな悲鳴が、辺りに響く。クルルは思わず飛び上がり、辺りを見回した。

「あー、なんだ？」

嫌な予感がした。

クルルは悲鳴の中心へ、やる気が無さそうな仕草で歩いていた。
さて何をやらかしたのか。

トラブルとアクシデントの匂いが、だんだんと強くなる。そんな事を考えながら角を曲がった、その時だった。

「クルル……」

そこにいたのは黒いケロン人だつた。顔は白い面積が多く、尻尾もある。帽子は赤く、耳のような突起がついていた。どうやら女性のようだ。

だが目を引くのはそんな事では無かつた。

鮮やか過ぎる赤く鋭い目。

それが今は薄く揺らいでいる。

クルルは黙つたままそのケロン人を見つめた。

「クルル……何が……あたしどうなつたの？」

クルルにはそのケロン人は全く見覚えは無かつた。

だが、分かる。

これは自分の知り合いだ、と言つ事が。

「弥々華、か？」

そのケロン人は首をコクコクと縦に振る。

いつそ幼いと言えるその動きが目つきの悪さと相まって、半ば滑稽に見えた。

「なにやらかした？」

「分かんないけど、気が付いたらなんかが爆発して……こんな事に」
弥々華の横には、大きな箱が落ちていた。恐らく粗雑に扱われたせいで暴発したのだろう。

クルルは思わずため息を吐き出した。

「ガサツ女」

弥々華は言い返す事もせず、ぼんやりと俯いていた。

会議室にクルルの命令で召集された面々は顔を上げた。視線の先にはクルル。

「説明するより見てもらつた方が早えだろ。入りな何があつた、と聞く暇もない。クルルは外に向かい、何気ない仕草で手招きした。

「驚くなよ」

クルルは酷く楽しそうに、笑う。現れたのは1人のケロン人だ。

「その女がどうかしたのか？」

ギロロはケロン人を品定めするような目で見た。軽く何かを持つたように見えたのは武器を転送したせいだろう。

「……あたしが誰か、全然分かつてないでしょ？」

苛立つたような声に、鉄を落としたような音がした。

「弥々華か？」

「当たり」

タママが椅子から滑り落ち、ケロロが目を見開く。

「うええ～！？ なんですか？」

「有り得ないでありますよ！！」

「有り得なくないからこんなナリしてんじょーが！！」

弥々華の怒鳴り声に、2人は萎縮した。いつもの数倍は不機嫌だ。

「で、何故そうなつたんだ？」

「知るか！」

ギロロの一言をたつた3音で切り捨てた。

「恐らく地球動物兵士化銃ハコブフエルソシテタピラガン」

なんてむちゃくちやな事始めてだがな

「それでいつ、戻れるありますか？」

ケロロの問いに弥々華の顔が分かりやすく曇った。

「……3日後」

弥々華が放つたその言葉にケロロは固まつた。

「……ご愁傷様であります」

「それなんか違うし」

弥々華は低くシッ 「むと、無言で頭を抱えた。
どうやら弥々華が元に戻れるまで今しばらくかかりそうだ。

To be continued?

オマケ

「あれ、やつと言えばドロロとモアは?」 「モア殿なら今買い物に言
つてるでありますが……」

「ドロロはどうした?」

「あー……忘れてたであります。多分まだ弥々華殿探してるかも……」

「探して」、「今すぐ」

弥々華 ょうじや、ケロン人ライフ であります（後書き）

とりあえず書いたのですが、小ネタ置き場に入れるには若干長かつたのでこいつちに。

続くかは不明です。

作者がネタを思いついたら、ここの小ネタ置き場に書きまます。

バレンタイン小話（前書き）

ちょっと早いですがバレンタイン小話です。
弥々華・モア・リップが登場。

バレンタイン小話

強く香る甘い匂いが、地下基地を満たしていた。

「モアさん、そのボールはこっちにお願いします」

緑髪をひとまとめにした少女が、褐色の少女に手を伸ばした。

「はい」

リップとデザインの似通つた、柔らかな色合いのエプロンを付けているモアが手渡したのは茶色い粉の入ったボール。

「ありがとうございます。オープン頼めますか？」

「はい、分かりました」

オープンの方に駆け出すモアを見送つたリップは弥々華に視線を移し、苦笑する。

一心不乱に卵を泡立てる弥々華の顔はかなり必死だ。

「もうちょい泡立てれば大丈夫だよ」

「ん……」

黒いシンプルなエプロンの弥々華は喉の奥で返事を返す。電動泡立て器を使わないこの作業は、要するに体力勝負。

「こんなんどう

「よし、大丈夫」

バニラエッセンスに茶色い粉、溶かしバターをえたのはリップ。モアの持ってきた型にそれを流し込む。

「第2段準備完了ね」

その時、柔らかな電子音が響いた。

「焼けたかな？」

浮かれた足取りでオープンに駆け出したのはリップ。それを2人は固唾を飲んで見守る。

取り出された焼き菓子に、歓声が上がつたのは次の瞬間。

ケーキクーラーに乗せられたのは小さな焼き菓子、ココア味のマドレーヌ。様々な形はケロロ小隊の階級章を模した物だ。

「これならおじさまに喜んでもらえます！！　つてゆーか感謝感激笑顔を見せたモアに弥々華もつられて笑みを零す。

リップは先ほど作った生地をオーブンに入れると、振り向いた。

「こっちこそ感謝します。こんな大きなキッチンを使わせて貰えて嬉しいです！！」

はしゃぐリップを横目に弥々華はぐつたりと椅子に体を預けた。

「うー、疲れた」

「弥々華、まだ焼くけど卵頼める？」

「それは勘弁して……」

三者三様の感想を残し、バレンタイン前夜は更けていく。

そして翌朝の侵略会議。

無事、ケロロとタママには甘味の効いた、ギロロとクルルとドロロには甘さを控えたココア味のマドレーヌが手渡された。

ちなみにリップの作ったお菓子はガルル小隊に送られたといつ。

fin

バレンタイン小話 2（前書き）

ガルル小隊 + ティト。バレンタイン小話の後日談です。

バレンタイン小話 2

ケロン軍本部はらしからぬ浮き足立つた甘ったるい雰囲気に満たされていた。

今日はバレンタインデー。

地球の日本という、小さな島国からケロロ小隊によつて伝わつたこの行事は、少なからずケロン軍にも影響を及ぼしている。

「あ、ティト曹長。これ……受け取つて下さー」

「ああ、どうも」

ティト イクス、16歳。

ケロン軍ではそれなりにモテる様子。本日15個目のチョコを手に、ケロンの女性軍人達を横目で見送る。

「はあ……」

吐き出したのは、喜びではなくうさぎの氣味の溜め息。

「甘じの、嫌いなんだよな」

どうせトロロやリップの菓子として消費されるのだろうと思つてゐる種の同情ともいえる溜め息が漏れる。

無造作に超空間倉庫にチョコを突っ込むと、ティトは田の前のドアを上げた。

「おはようござこまー」

「あ、ティト曹長。おはようござこまー」

「おはよう」

「オハヨー~」

ティトはようと片手をタルルヒトロロに上げると隊長であるガルルに一礼し、フルルにも会釈すると最後に持つていた鞄をデスクに置いた。

ここはガルル小隊の専用小隊ルーム。いわゆる仕事部屋だ。

「おいたルル、トロロ」

「なんすか?」

「なあに?」

「うわ！？」

「え？」

「ハッピーバレンタインだと」

素の氣ない表情で、テイトは元スケに向かう

「リップか。手作り芝居」

タルルの顔がぱあつと輝く。

「はいっす！！ ありがとうございますって伝えて下さい！！」

「毎年すまないな」

「いえ、あいつの趣味ですから」

「あー、ちゃんとお菓子で美味しいのよれ。

ティトは視線を動かして、動かして、動かして、動かして。やつと

男の子がソーラーにも食事を手渡せば「屏く食つて下され」。腐りますか?」

۷

「分かりましたか？」

「馬鹿」……ある……な

「アーリー、アーリー、アーリー」で口を開けていた

摘んだのは、渦巻きのマダレーヌ。色は焦げ茶。

それを見たティートとタルルが、無言で凍りつく。

「なんでボクがあんな嫌な奴のマークを食べなきゃなんないノ?」

やがらかした

今にも泣きそうなトロロに「ティトはやつと」しゃと言ひた感覺で呻いた。渦巻きはクルルのマーク。ケロロ小隊の分と一緒に作り、何の気なしに入れたのだろうが

「十分地雷だ……」

その時だった。

「ゼロ……口……」

ティトの背が粟立つ。冷すぎる殺意が、部屋を満たす。
ぐしゃりと何かが潰れる音。更に風が部屋から消えた。

「そ……総員警戒態勢！！」

ガルルはすぐに立ち直る。

「ゾルルを格納庫には行かせるな！！」

「「「「了解」「」」

慌てふためきながら、ガルル小隊は小隊ルームを後にする。
誰もいなくなつた小隊ルームに残つていたのは踏み潰されたドロロ
の階級章を模するマドレーヌだけだった。

ガルル小隊は今日も平和……なのかも知れない。

fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2667n/>

掌編集

2011年2月17日00時26分発行